

TA との連携による課外活動の試み

西川 葉澄、東 志保、古賀 健太郎

NISHIKAWA Hasumi, AZUMA Shiho, KOGA Kentaro
Université Chrétienne Internationale (ICU)
nhasumi@icu.ac.jp

はじめに

国際基督教大学 (ICU) ではフランス語の授業全体に 2 名のティーチングアシスタント (TA) がいるが、大学改革の影響を受け、TA 業務も従来のものから見直しを迫られた。現在 TA の効果的な活用を模索している最中である。

1. ICU におけるフランス語への大学改革の影響

ICU には 2007 年までは語学科があり、フランス語学専攻が英語専攻、日本語専攻と並んで配置され、卒業論文を書く言語として認められていた。フランス語は他の一般的な第二外国語に比べて特権的な地位を享受していたが、2008 年より学科制が廃止となると「世界の言語」というセクションの中に他の第二外国語と共に分類され、学内での重要性も低下した。

一方、2008 年以降においても ICU におけるフランス語の授業は、かつてのフランス語専攻時代の名残により、他の第二外国語よりもコマ数の多い「集中フランス語」(週 9 時間¹) という授業が「世界の言語」の中で唯一存在している。その他には、フランス語 (週 6 時間)、上級フランス語 (週 3 時間) という授業があり、夏季の海外フランス語研修が単位となる。他の第二外国語に比べて多くの授業数があるが、フランス語を担当する教員は特任講師が 1 名のみであり、6 名の非常勤講師とのチームティーチングをコーディネートしている。

また、ICU における「世界の言語」の位置について簡単に説明しておく、フランス語の他に、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語の合計で 6 つの言語があるが、全体で専任教員は 3 名のみ²であり、「世界の言語」の一言語として機能するように各言語間のバランスのコーディネートが大学より要求されている。履修は任意であり卒業に必要な単位ではないため、履修が義務付けられていない選択科目の扱いになり、必修単位数を超えた単位は卒業の要件としては数えられない。

¹ ICU における 1 授業時間は 70 分である。

² フランス語、スペイン語、韓国語のみに専任教員がいるが、その全員が特任講師である。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

全学で必修の英語プログラムのために1年次からの履修が実質的に困難であり、一般的な履修は2年次からとなる。このように第二外国語の履修があまり推奨されていない環境において、それでもフランス語を履修する学生を観察すると、既にモチベーションが高く、フランス語に対しても語学学習に対してもポジティブなイメージを持つような学生像が浮かぶ。この高いモチベーションをどうやって維持し続けていくのかということがまず課題となるのだが、教員だけではこうしたニーズに応えていくことが大変難しく、TAによるサポートは必要不可欠である。

2. TAの業務形態の変化

大学改革が続く中で、TAの業務形態もまた変更を余儀なくされた。かつてはTAに任命されることに奨学金的な意味合いがあったというが、2011年度末にフランス語の専任講師が退職し、新任の特任講師に代わると同時に長年フランス語専攻室として使用されていた空間が廃止され、それに伴いフランス語TAの専用机がなくなった。こうした変化により、2012年度からはフランス語TAの仕事場が空間的に消滅し、TAデスクに待機して質問に来る学生に答えるという従来の業務の続行が困難になった。加えて、それまで突出して多く確保されていたフランス語TAの時間数も「世界の言語」内で平等な分配とするために徐々に減少となった。

こうしたことから、2012年度よりTA業務全体の捉え直しと改革の検討が大きな課題となった。特任講師が多数の授業を受けもちつつ、コース全体をデザインしながら非常勤講師とのチームをとりまとめ、同時に煩雑な事務作業をこなしながら、なおかつ学生のモチベーションを向上・維持するための工夫をこらすことはほぼ不可能であり、TAの時間数確保はTAのみならず教員にとっても死活問題である。減少していく一方のTAの時間数をいかに確保し、TAにとっても、教員にとっても、また高いモチベーションを持つ学生にとってもプラスとなる新しい業務の形を創出するにはどうしたらいいのか。まず、TAは一般的に高学歴で、専門分野の高い知識と語学力を持つ。留学経験もあり、何よりもその「若さ」のために学生との心理的距離が近い。こうした資質を持つTAを、語学を継続して学習するとこのレベルに到達できるという学生のロールモデルとして提示し、彼らの専門分野の知識やフランス語能力を活用し、さらに将来教員として組織で働く時のためにコミュニケーション能力を養成し、またTA業務といえども、その活動を形に残す形態にしてはどうかということから、2012年度に2つの新しい挑戦が模索された。フランス語学習者向けミニ新聞と授業時間以外にフランス語で話す集いの場の組織化である。

3. TAによるフランス語学習者向けミニ新聞「TAVU？」

まず、この新聞作りの目的は、文化面からの誘惑によるフランス語学習のモチベーション作りおよびその維持である。主な対象はフランス語の授業履修者、海外フランス語研修参加者などとし、編集は現職のTAが担当し、執筆には現職のTAに加え、かつて本学でTA経験のあるフランス留学中の大学院生2名がボランティアで参加した。「TAVU？」というタイトルは、TAとT'as vu? (Tu as vu?)を合体させた現TAによる造語であり、「ねえ、あれ見た？」と話題になるような情報を提供したいとの思いから付けられた。紙面はA3の裏表カラー印刷を二つ折りにした

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

4 ページで構成されており、1 面はフランスの地方都市案内と映画紹介が現職 TA によってそれぞれ執筆されている。2 面は旧 TA がそれぞれの留学地（ボルドーとパリ）から留学レポートを寄せている。3 ページ目に教員への親近感を持たせるとの狙いから、毎回 1~3 名のフランス語教員やフランス語に関わりのある本学教員のインタビューを紹介した。4 ページ目にイベント等の告知やその他の情報を載せている。

10 月よりほぼ毎月の発行を目指したが、発行までの流れとしては、まず発行 1 ヶ月前の記事内容の決定後、各自が記事を執筆し、発行の一週間前に原稿が校了となり、紙面編集に入る。できるだけ多くの学生に読んでもらえるようにビジュアル面に配慮し、写真を多用した。毎回約 100 部程度印刷し、主に授業内で教員が配布したが、壁面掲示板への掲示、関係教員やフランス語圏からの留学生、過去フランス語履修者等にもあらゆる手段で配布した。またフランス語とは関係のない一般教養科目の授業においても配布してもらえるなど、フランス語を受講していない学生の目にも止まるような機会があった。

年度末に行った学生アンケートの結果³では、「毎回楽しく読みやすかった」など全体的に肯定的な評価が出たが、今後の記事内容については食べ物、料理のレシピやファッションについての記事、フランス語勉強法についての記事を希望するといった様々な要望が見られた。人気のある記事としては教員インタビューが半数を占めた。来年度に読みたい記事のジャンルは多岐にわたったが、フランス語圏旅行情報、東京で見つけるフランスといった異文化発見もののほか、食べ物、映画といった文化的コンテンツに興味が集まった。

TAVU? の発行に予想以上の反響があったことは、TA にとっても驚きだったという。フランス語の受講者のみならず、本学教職員、フランス語未習者などからも反響があり、実際の学生のモチベーション維持や向上だけでなく、潜在的なフランス語受講者の開拓にもある程度の効果が期待された。また、タイトなスケジュールのため、授業ではなかなか自由に取り上げる時間のない文化面や現地での生の情報などの、フランス語に関する背景知識を身につけてもらうひとつの補完的なツールとして TAVU? を活用することができた。そして、この新聞を通して TA の認知度が高まったことによる効果も期待できる。より身近な存在となった TA を学生が自主学習のために積極的に活用するスタイルが定着すれば、よりいっそうの学習意欲の維持・向上につながると考えられる。

この TAVU? は 2013 年度も継続して発行していきたいと考えている。好評の教員インタビューは、フランス語教員に限らず、学問にフランス語を使う他分野の教授たちのインタビューに拡大することで、学生に学問ツールとしてのフランス語を実感させたり、フランス語を多少なりとも話せる英語の先生などの紹介を通して、学生に英語かフランス語かなどというクリシェ的対立ではなく、複言語話者という発想に自然に馴染んでもらいたい。また、旧 TA のボランティア参加という負担を避けるためにも、新コーナーで積極的に大学生の参加を促していければと考えている。アトリエでは参加者から「仏検合格者の体験記を載せる」、「留学レポートは大学生から募る」、「TA は編集に徹底すると負担が減る」などの意見をいただいたが、

³ 回答者数 35 名。

2013 年度よりぜひ取り入れていきたい。

4. フランス語で話す集い：Déjeuner amical の開催

フランス語を継続して学習するためには、常に学生のモチベーションが刺激されることが好ましいが、日本には授業以外でフランス語を使う機会を持つことが難しい。フランス語サークルもアルバイトや就職活動で多忙な現代の大学生には就職活動時の履歴書に書く項目という以外あまりメリットを感じないようである。しかし国際性を謳う校風のメリットを生かし、学内のフランス語圏からの留学生に呼びかけ、サークルよりも縛りの少ない小さなフランス語話者コミュニティを組織してはどうだろうかという発想から Déjeuner amical が発足した。

Déjeuner amical は、フランス語履修者、海外フランス語研修参加者、フランス語圏からの留学生を対象に、昼休みに週に 1 回、開催された。誰でも参加でき、必要なら自分のランチを持ち寄り、テーマに沿ってフランス語でおしゃべりする会である。場所は会議室を予約し、毎回お菓子とお茶を用意した。

各回の会話のテーマは学生の意見を取り入れながら作成し、スケジュールと共に TAVU?紙上で告知し、予定表を授業で配布するなど工夫した。また、直前の告知として、対象者のメーリングリストを作成し、Déjeuner amical が開催される 2 日前に、お知らせメールを配信した。今までに全 5 回行われた各回のテーマは、「フランスの若者ってどんなかんじ?」(第 1 回目)、「おすすめの本と映画」(第 2 回目)、「おすすめの食べ物」(第 3 回目)、「おすすめの旅行スポット (日本/フランス語圏)」(第 4 回目)、「バレンタインの習慣の違い (日本/フランス語圏)」(第 5 回目)である。参加者は、平均 3、4 人ほどで、ほぼ毎回フランス人留学生の参加があった。日本人学生は、初級レベルの学生と中級・上級レベルの学生の違いがあったため、特に初級レベルの学生に関しては、教員および TA のサポートが必要だと感じられた。また、会が終了した後、日本人学生とフランス人留学生で会話を続けている様子も多く見られ、日仏学生の良い交流の場となることができた。

また、TAVU?と同じく、学期末に学生を対象とするアンケートを行った⁴。参加に関しての質問で、「結構参加した」と答えた学生はわずか 6%であった。参加した学生に日程や時間の長さについて聞いたところ、ほとんどが「ちょうどよい」と答えた。また、参加した感想としては、「フランス語会話能力を磨くのに役に立った」が 57%、「Francophoneの留学生と知り合えた」が 27%、「レベルが高すぎる」が 16%で、肯定的な意見が多かった。次に、参加しなかった理由としては、「予定が合わなかった」が 62%、「躊躇してしまった」が 29%、「特に行こうと思わなかった」が 9%であった。このことから、特に本学では授業のスケジュールが詰まっているため、学生の都合に合わせた日程設定が必要なことがうかがわれた。さらに、全員にDéjeuner amicalが今後もあったら参加したいか聞いたところ、「予定があればぜひ参加したい」が 45%、「1 回くらいはためしに参加してみたい」が 43%、「参加しないと思う」が 5%と、多数が参加してみたいと考えているということが分かった。最後に、全員に「今後、どんなフランス語関連のイベントがあったら参加したいですか?」と聞いたところ、「料理教室」、「映画上映」、「フランス語講演会」など、文化活動のイベントが 50%を占め、「文法の復習」や「仏検対策」等の勉強

⁴ 回答者数 48 名。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

関連のイベントは27%、「遠足」や「花見」、「ピクニック」等の屋外でのイベントが23%であった。学生達は、勉強関連やレジャー系のイベントより、文化活動に興味を持っていることが分かった。以上の結果により、Déjeuner amicalへの潜在的な参加希望者は多く、その内容を文化活動に比重を置くことが参加者を増やす要因になりえることが示唆された。

Déjeuner amicalの2013年度の課題としては、日本人学生の参加数をいかに増やすかということがある。日程をより学生の参加しやすい時間帯に調整し、告知をさらに徹底することが急務であり、2013年度よりTwitterの利用によりフランス語関連の学内イベントの定期的な告知を開始した。

5. TA との連携活動を振り返って

このように2012年度は、外部的理由から従来と異なる形でのTA業務の展開を余儀なくされたが、この危機が転じて幸いにもプラスになったことが多かった。まず教員側からは、TAとの新たな連携活動においては仕事が増えた、準備に時間が取られる等のマイナス点はあったが、こうした活動を通してTAが学生をインスパイアすると同時に教師・学生間の世代間のギャップをうまく中和する役割を果たすことで活動が円滑に進み、結果として履修者を中心とするフランス語コミュニティが活性化され、また学内に話題を提供する機会となったというプラス面が大きいと感じた。活動の枠組みが出来た事で、次年度からは活動がより円滑に行えることも予想される。

一方TAの側からは、TAVU?の月刊発行スケジュールがきつい、TAが学生からの質問に答える定位置がないためにメールでの対応になり負担が増えたというマイナス面はあったが、新しい活動を通して彼らのTAとしての存在意義を宣伝でき、多くの学生と知り合う機会が増え、将来教員になった時のクラス運営に向けての良い経験になったと感じたようである。アトリエの最後のディスカッションでは、参加者に今後の活動続行のための多岐にわたるアドバイスをいただき、連携活動の試みを発表できたことが非常に有意義な機会となった。

おわりに

TAVU?による情報発信とDéjeuner amicalを中心とするフランス語履修者とフランス語圏からの留学生、学内のフランス語関係者によるフランス語コミュニティ作りを二本の柱として、2013年度も継続してTAとの連携活動を続け、学生はもとより教員、TAの双方にメリットのあるよう、さらなる模索を続けていきたい。

2013年度からはフランス語教員の研究室の移動に伴い、幸運にもTAの常設デスクの確保と学生の談話スペースを作ることができた。TAの活動の場が定着したことに加え、味気ない会議室に比べると格段に居心地のよいDéjeuner amicalの場が可能になったことの意義は大きい。また新学期にフランス語のイベントを告知するTwitterを導入したところ、学生のフォロワー登録が増え、時代に即した情報ツールの重要性を実感した。2013年度も引き続き新たな挑戦を続けていきたい。